

『# 対馬の海に沈む』（窪田新之助著）を読んでみた。著者はノンフィクション作家。2004年 JA グループの日本農業新聞に入社。国内外で農政や農業生産の現場を取材し、2012年よりフリーに。著書は農業関係。2024年 本書で第22回 開高健ノンフィクション賞受賞。

舞台は人口わずか3万人の長崎県の離島対馬。その海に自らが運転する車で飛び込んで溺死したのが日本一の実績を誇り「JAの神様」と呼ばれた44歳の男性である。

その4年後、著者が「なぜ死んだのか」に疑問を感じて、執拗な取材を開始する。それよりもなぜ4年間も自殺の原因を誰も探ろうとしなかったのだろうか。過疎の離島対馬の一 JA 職員がなぜ実績日本一で何年間も全国表彰され続けたのか。住む人口が少なければ契約を取ろうにも思うようには取れないだろう。それが何十年も最高の契約件数を取り続けることに JA 上層部は疑問を持たなかったのであろうか。実は彼には以前より巨額の横領の疑いがあったのだ。しかしそんな横領がたった一人で成しえるものなのだろうか。その謎にメスを入れたのが本書である。

詳細は本書を読んで欲しいのだが、横領の始まりは台風被害への過大な補償金の申請である。その横領した金を JA の構造上の問題である営業ノルマを回避したい同僚に分け与えながら、自分の裁量権が甚大となる王国を築いていく。従わない者は排除する。JA と契約した住民は台風被害がないのに思ってもいない補償金を手に入れば悪い気はしない（多くの島民との間に壮大な共犯関係が成立していた）。そして知ってか知らずか、多くの住民が印鑑も通帳も彼に預けてしまう（ノルマを果たすために、共済保険契約の成約と解約を簡単に繰り返すことができる、それを見逃し続けた JA のガバナンスの欠如は問題であろう）。そのような JA の組織上の様々な問題や住民の「金」への執着が22億円にも登る不正横領事件に発展したのである。

小さな謎から大きな謎へ取材を通じて追い詰めてゆく過程は手に汗を握るものがある。本書はノンフィクションの傑作と言えよう。

農業協同組合（通称：農協）は、日本において農業者（農民又は農業を営む法人）によって組織された協同組合である。愛称として JA (Japan Agricultural Cooperatives) と呼ぶ。戦後の農地改革の一環として、GHQ は農地改革で生ま

れた戦後自作農を守るための制度として、自主的で自立的な欧米型の農業協同組合の創設を日本政府に指示した。しかし、当時の食料行政は深刻な食糧難の中で、食料を統制・管理する必要があった。農林省は集落を単位とする農家組合等を構成員とする農協制度を構想してGHQと交渉し、1947年に農業協同組合法が公布・施行された。1992年4月から「農協マーク」に代わり、「JA」の名称や「JAマーク」を使い始める。

JAの問題点は、1) 信用事業の収益悪化、2) 共済事業の収益悪化、3) 職員の人件費の高騰、4) 事業取扱高の減少、5) 農村における取扱いシェアの減少、6) JAの組織基盤の弱体化。

農協の経営危機の要因は、1) 超低金利政策、2) 他金融機関との競合激化、3) 農林中央金庫奨励金引き下げ、4) コロナ禍、5) 金融自由化の影響、6) 有価証券投資への傾斜。農協の課題を解決するためには、事業モデルの転換や事業のデジタル化の推進が必要とされている。

JAで発生した事件や問題は、1) 元職員による着服、2) 営業ノルマを達成するための「自爆営業」や不正契約、3) パワハラによる職員の自殺、4) 過剰な営業ノルマによる組織風土の問題。

事例としては、1) 元男性職員が顧客から預かっていた通帳を使い、約2500万円以上を着服、2) 農協職員が営業ノルマを達成するために、本来不要な共済（保険）を契約する「自爆営業」や、契約者の利益にならない不正契約が発覚（本書と同じ）、3) 農協職員がパワハラにより自殺、4) 一部のJAで共済事業の自爆営業が、いまだ黙認されていることが職員の証言から明らかになった。